

企画展 ^{いん えい} 陰翳のなかの金彩 【近現代工芸】



雲龍庵 北村辰夫《更紗蒔絵十字架》2007年、金沢21世紀美術館蔵
撮影：渡邊修 画像提供：金沢21世紀美術館
—「陰翳のなかの金彩」より—

■ 特別陳列 利家を描く—再考と顕彰—【前田育徳会尊經閣文庫分館】

■ 加賀文化の粹Ⅱ【古美術】

■ 四季の移ろいⅠ【近現代工芸】

■ 優品選【近現代絵画・彫刻】

- 展覧会回顧 かねは雄弁に語りき
- 土曜講座を開講します
- 学芸室の人々
- 当館公式ウェブサイトが新しくなりました
- 5月の行事予定
- 美術館だよりの郵送について
- 今年度の目玉

企画展(第7・8・9展示室) 陰翳のなかの金彩

主催／石川県立美術館 特別協力／金沢金箔伝統技術保存会、石川県箔商工業協同組合、北國新聞社
後援／NHK金沢放送局、MRO北陸放送、石川テレビ放送、テレビ金沢、HAB北陸朝日放送

4月23日(日)～5月28日(日) 会期中無休

四月二十三日に開幕しました本企画展、すでにご覧いただけましたか。今号では、二章構成となっている展覧会の中身について、もう少し詳しくご案内いたします。

また初の試みとして、従来より暗い照明のなかで作品を味わっていただく「陰翳コーナー」を設けました。暗がりのなか、ほのかに照り映える金色の美を、ぜひ会場で体感いただければ幸いです。

第一章 金箔と金沢

日本の金箔の99%は金沢で作られていることはご存じの方も多いのではないのでしょうか。本章では、金沢での金箔製造はどのように始まり、発展していったか、そして現在も作り続けられている伝統的な金箔についてご紹介します。

近世初期にはすでに金沢において箔が作られていたことが知られています。しかし貨幣の地金となる金銀は幕府によって統制され、金沢の製箔もいったん途絶えたようです。文化五年(一八〇八)に焼失した金沢城二の丸の再建を機に、禁制下でありながら再び製箔が行われるようになり、文久四年(一八六四)には、押し箔商人越野左助の尽力によって公許を得ます。

やがて明治維新を迎え箔業界は一時衰退しますが、大正四年(一九一五)には箔打機が導入されて生産性が向上します。近代化の流れのなかで他地域の製箔はやがて勢いを失い、金沢に生産が集中していききました。現在では金沢でしか行われていない製箔、なかでも縁付金箔は、伝統的な工法と熟練の手わざによって製造され、文化財の修復や工芸の加飾になくてはならないものとなっています。

第二章 工芸と金彩

金や銀を用いた装飾を広く金彩、銀彩といいます。素材によって使用される金銀の形態はさまざまであり、その輝きも千差万別です。本章では、陶芸、漆芸、染織にみられる金銀彩の多種多様な形態をご紹介します。

陶芸作品に金彩を施すことが普及したのは、中国・明時代(十六世紀)の景德鎮窯のいわゆる「金欄手」からです。日本では十七世紀後半に上絵付の技術が確立すると、金銀彩も積極的に取り入れられ、発展していきました。

漆芸の加飾もまた中国に端を発しますが、日本で高度に発達し、古代にはすでに金銀粉や箔などを用いた蒔絵技法が確立していました。とくに輪島では金箔を用いた沈金の技法が発達したほか、金沢では加賀蒔絵と呼ばれる絢爛な様式が生まれました。

染織では、金銀糸を織り込んだ金欄／銀欄が中国から輸入されて珍重され、十七世紀に入ると日本でも織られるようになりました。また型紙を使って金銀箔を糊で接着した摺箔や金銀糸を使った刺繍も行われました。

現代においても作家たちが、さまざまな金銀彩の技法と自己の表現を結び合わせた作品を制作しています。

■観覧料

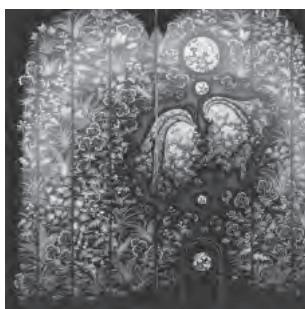
一般1,000円(800円)

大学生800円(600円) 高校生以下無料

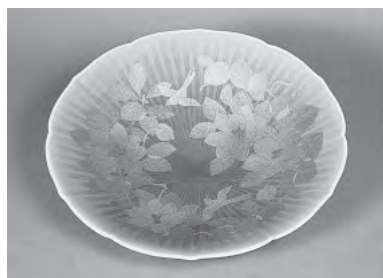
※2階コレクション展観覧料を含む

※(一)内は65歳以上の方および20名以上の団体

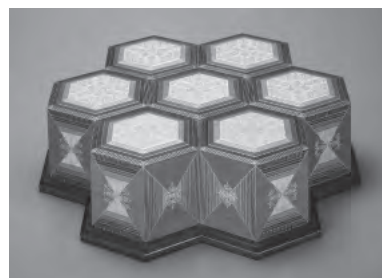
※身体障がい者・精神障がい者保健福祉・療育手帳をお持ちの方、またはミライロIDをご提示の方および付き添いの方1名は観覧無料



小西啓介《くさむらⅡ》
石川県輪島漆芸美術館蔵



吉田美統《釉裏金彩大山蓮花文鉢》



江里佐子《截金六角組飾箱 六花集香》
国立工芸館蔵、撮影者：アローアートワークス

前田育徳会尊經閣文庫分館 特別陳列 利家を描く―再考と顕彰―

4月23日(日)～5月28日(日) 会期中無休

学芸員の眼

金沢で箔が製造されたことがわかるのも古い記録は、文禄二年（一五九三）、文禄・慶長の役に従軍していた前田利家が、武者揃えの槍を装飾するために、金沢へ銀箔、能登へ金箔を打つように命じたものです。しかし江戸時代に入ると、金銀の取り扱いが幕府によって統制され、金銀箔の製造は、江戸、京都、大坂以外では認められませんでした。

時は下って文化五年（一八〇八）正月、金沢城二の丸が焼失し、再建のために大量の金箔が必要となりました。安江木町の押し箔売人、箔屋伊助は京都から箔打ち職人を連れてきて自宅で箔を打たせました。箔打ちは、その技を習い覚えた伊助と弟子たちからその後、材木町の安田屋助三郎に引き継がれましたが、幕府に禁じられているので、しばしば差し止めを受けたようです。

そうした状況を打開しようと、箔打ち公認のために尽力したのが越野左助です。弘化二年（一八四五）に江戸箔の藩内における専売権を得、文久四年（一八六四）には、ついに城内で使用する分限り、箔打ちの許可を勝ち取りました。

明治時代に描かれた前田利家画像の中で、「どうして、こんな姿で描かれたのだろうか？」と思ったのが、聖護院浄願寺宮二品道寛法親王の讃を持つ《前田利家画像（高徳公尊像）》を見た時です。向かって右を向き、少しくだけたような姿で描かれています。少しくだけたような姿といえば、「脇息にもたれる」石川県指定文化財の《前田利家画像》（個人蔵）が思い出されます。この画像の制作背景は不明ですが、利家画像の多くが、御簾の下に衣冠姿で座し、尺か扇を持つ姿であるのに対し、唯一の画像といえます。脇息は描かれていないものの本画像は、それに似ているのです。

讀者である聖護院宮道寛法親王は、後水尾天皇の第十三皇子で江戸前期の聖護院門跡です。後水尾天皇と前田利常とともに將軍秀忠の娘を室とした義兄

弟であり、当時の京都で華開いた寛永文化の影響を、前田家は強く受けたとされています。この寛永文化を生んだ人々の間で流行したのが、「脇息にもたれる姿」の肖像画でした。「維摩像」「人麻呂像」を連想させる図像として、隠逸の賢者または優れた歌人をあらわすといわれています。

明治時代に描かれた本画像は、この「脇息にもたれる利家像」の羽織を、礼装である直垂姿に改変したものではないかと推察しています。烏帽子を脱いだ直垂姿でくつろぐ姿の上に、利家の功績が記されるといふ不自然さも、本来の画像を「改変」したと考えると、納得できます。



《前田利家画像（高徳公尊像）》



《二之御丸御殿御造営内装及び見本・絵形》巻二（部分）
金沢市立玉川図書館 近世史料館蔵

近現代工芸(第5展示室)

四季の移ろい I

4月23日(日)~5月28日(日) 会期中無休

今年度コレクション第5展示室では4期に渡り四季の移ろいⅠ~Ⅳと題して、共通としたタイトルを、さまざまな切り口でお届けします。スタートとなります今期では草花の彩りから四季の移ろいを満喫していただきます。

前号では、春から夏に向かう作品を数点紹介いたしました。北陸の冬といえば白・グレーという色合いを想像できます。そんな冬色から優しい色合いへと流れる、若葉がまぶしい草木やふわりと開きだす花の姿から待ち望んだ暖かい季節を感じます。そして実際に描かれていないことが多い雨も、草花の姿、色あいから感じられる梅雨を抜けて、色濃い夏へ。暑さから逃れた後は、紅葉・落ち葉のように落ち着いた

姿・色合いの秋を、というように四季の移ろいを展示室一周から見てもわられます。

夏から秋へと流れる草花として、露草、朝顔、向日葵、蓮、菊など、材質を超えて展示しました。水盤の口まわり、高台に露草が透彫されている南部勝之進《青銅露草文水盤》、とつぷりと暮れていく蓮池に静かに開く葉と花の様が印象深い北出不二雄《彩釉陶 暮れる蓮池》、さわやかな青地に白い百合が美しい窪田裕兆《友禅訪問着「白百合」》などを紹介します。

このほか、今回1階企画展示室では「陰翳のなかの金彩」が開催されています。同じ作家や、草花などを企画でも見つけられます。金彩の楽しみとともに草花についても合わせてお楽しみください。



北出不二雄《彩釉陶「暮れる蓮池」》

古美術(第2展示室)

加賀文化の粋 II

4月23日(日)~5月28日(日) 会期中無休

今回は、久隅守景の魅力について改めて考えてみたいと思います。「田園画家」とも呼ばれるように、守景は耕作図を数多く描いています。そして、表現様式は中国風俗から日本風俗に移行していきます。そこには、中国由来の画題を同時代の風俗に翻案するという守景の強い意識を感じます。こうした姿勢を促したのが、加賀藩主・前田家が推進した文化政策でした。守景が耕作図を多く描いたのは、二度目に来藩した一六七〇年代で、五代藩主・綱紀の時代でした。綱紀は守景の人となりをよく理解していたと伝えられているように、特に重文の《四季耕作図》にはこの両者の良好な関係が表れています。

たとえば冬の場面に描かれた代官一行で、加賀藩の先進的な農業政策がさりげなく称賛されています。さらに、一行が描かれた画面上の位置は、積み藁

のところで無邪気に犬と遊ぶ子供よりも下になっています。ここにも、庶民を慈しむ加賀藩の善政が礼賛されています。

守景の画業で注目したいのは、庶民や動物に向けられる優しい眼差しです。狩野探幽門下の傑出した画家として将来を嘱望されていた守景が、その門を去ることとなった真相は不明ですが、家族の離散など深く心を痛めたことでしょう。こうした経験が、多くの人々の共感を呼ぶ表現へと結実したのではないのでしょうか。そして国宝《納涼図》(東京国立博物館蔵)に見られるように、素朴な庶民の日常を描いた中に、和歌や深い仏教思想が含意されている点も、学者大名だった前田綱紀のもとで画業を開花させた、守景の大きな魅力となっています。



重文《四季耕作図》久隅守景(部分)

展覧会回顧

かねは雄弁に語りき

—石川県立美術館の金属コレクション—

会期：令和5年1月4日(水)～2月5日(日)

近現代絵画・彫刻(第3・4・6展示室)

優品選

4月23日(日)～5月28日(日) 会期中無休

企画展「陰翳のなかの金彩」にちなみ、日本画分野の作品の里見米菴《クメール崩壊》を紹介しつゝ。アユタヤによるクメール王朝侵略を描く本作は、アンコールワット遺跡の回廊レリーフから着想を得ています。レリーフが描くのは、王朝の英雄譚「ラーマーヤナ」ですが、皮肉にもここでは王朝が崩壊する様子になぞらえています。劫火に見立てた金彩が、黒と白の画面に配色効果を上げています。

彫刻分野から動物彫刻として紹介する富永直樹《大将の椅子》は、装飾的で重厚な椅子にちょこんと座るペルシャ猫の表情と佇まいが愛らしいブロンズ作品です。蒼い目に豊かな体毛、太くふさふさした尻尾は、すべて金属でできているとは思えないほどの実在感があります。

油彩画分野から紹介する作品は、鴨居玲《望郷を歌う(故高英洋に)》。白いチマチヨゴリに身を包み、拳を握りしめて高らかに歌い上げる女性を描きます。モデルは在日韓国人画家・李景朝の夫人であり歌手の李順子^{イ・スンシ}。関西で開催されたコンサートには鴨居が尽力しました。暗がりに浮かびあがる姿からは、昂揚感と力強い存在感が感じられます。

版画分野の作品で紹介する脇田和は、絵はすべて自画像であり永い時間をかけて自分自身を描いていくことだと語っています。脇田は想像の中の自分自身である鳥に、様々な表情を見せ歌声を響かせ、また、自在に飛び交わしています。画家の鳥に託したメッセージを、一枚一枚の作品から受け取ってご覧ください。

美術館活動の核はコレクション(収蔵品)です。石川県立美術館のコレクションの特色は幅広い分野・時代の作品を所蔵していることです。「石川ゆかり」をキーワードに、古美術・工芸・絵画・彫刻などを網羅する作品群が、一九五九年の開館以来、今日まで受け継がれています。

本展は、当館コレクションの魅力を発信する事業として企画されました。「金属」というテーマを設定し、古美術から現代までの作品が一堂に会する内容にしました。ふだんは時代や技法ごとに別々の展示室で紹介されている作品を同時に紹介する内容は、当館としては新たな試みとなりました。銅鑼の音の

展示、「自在置物」の動画での紹介、デジタル図録、SNSでのほぼ毎日の作品紹介、かけあいでのギャラリートークなど、初めての企画も多く実施し、金属の世界をお楽しみいただけられるよう工夫しました。冷たい、無機質などとイメージされることも多い金属ですが、実は色彩豊かで様々な表情をみせる素材であることをご体感いただけたのではないのでしょうか。若手学芸員チームで協力して準備を行ってきた本展。ありがたいことに、アンケートなどで嬉しい評価をたくさんいただきました。金属の魅力、コレクションの豊かさを発見する機会としていただけたなら、幸いです。



会場風景



脇田和《鳥飼》

令和5年度の土曜講座のお知らせ(前期分)

令和5年度土曜講座を5月より開講します。開催中の展覧会に関連したテーマや、当館学芸員が日ごろ研究しているテーマで行う講座となっております。5月～10月までを前期、11月以降を後期とし公開します。時間は毎回午後1時30分より3時まで。事前申し込み不要、聴講無料です。お気軽にご参加ください。

※新型コロナウイルスの感染状況により日時などを変更、または中止する場合がございます

No.	月/日	テーマ	担当
1	5月13日	縁付金箔と工芸	寺川和子
2	5月20日	金銀彩と九谷焼	奈良竜一
3	6月10日	仏教絵画入門	鈴木彩可
4	6月17日	コレクション第5展示室(近現代工芸)スライドトーク	西ゆう子
5	7月8日	加賀藩歴代藩主の甲冑・陣羽織と加賀象嵌鎧	村上尚子
6	10月21日	後水尾天皇と前田利常	村瀬博春

学芸室の人々

初めて訪れたのは、中三の春。順路を進むと三体の仏像が目に入った。不思議な空間と感じた。同じ年、修学旅行の学生ガイドの説明で歴史に目覚めた。のちに教師を目指すきっかけともなった。四十年の時を経て、未公開の空間に足を踏み入れる幸運に恵まれた。須弥壇修理で安置されていた諸仏は堂外に避難しており、堂内は妙に広い空間だった。その中央に立った時、得も言われぬ感覚に陥った。穏やかで周りがまったく気にならない不思議な感覚。それでいて、舞い上がるような高揚感。初めて訪れた時のことを思い出した。

その場所は、法隆寺金堂。



谷口 出(副館長)

またまた継続決定！

「学芸室の人々」コーナー

学芸員にスポットをあてる「学芸室の人々」コーナー、新年度も継続してお届けします。三周目となる今年度は、「美の感動体験」をテーマに、各学芸員に語っていただきます。どうぞお楽しみに。

公式ウェブサイトが新しくなりました

石川県立美術館の公式ウェブサイトがリニューアルしました！みなさまはもうご覧になりましたか？今までの機能はそのままに、年間の展覧会開催情報を簡単に検索できるページを新設し、当館をご利用の際に役立つフロアマップやアクセスも見やすく更新いたしました。クイズや動画が楽しめる「おうちで楽しむ石川県立美術館」や、石川県文化財保存修復工房のページもデザインを一新してパワーアップしております。これからぜひご利用ください！



トップページでは、雉香炉の画像がみなさまをお迎えします

5月の行事予定

■土曜講座		13時30分～15時	美術館講義室	無料
13日(土)	「縁付金箔と工芸」	学芸第二課長	寺川 和子	
20日(土)	「金銀彩と九谷焼」	学芸主任	奈良 竜一	
■企画展「陰翳のなかの金彩」関連イベント				
4日(木祝)	ギャラリートーク			
6日(土)	各日13時30分～14時30分	美術館企画展示室	要観覧料	
7日(日)	ワークショップ「ミニ屏風に絵を描こう！」	美術館講義室		
14日(日)	10時～12時(親子で楽しむ回) 14時～16時(オトナも楽しむ回) ※申込は終了しています			

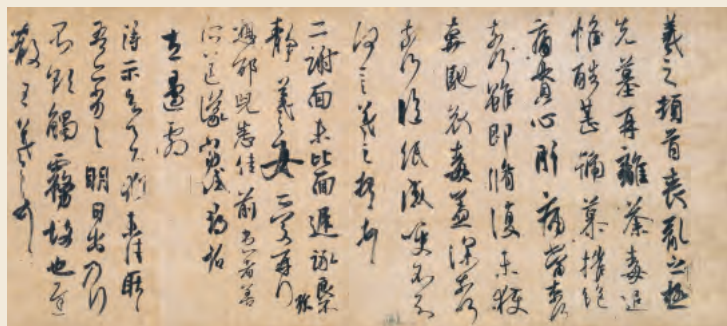
美術館だよりの郵送について

毎月末から月初めにかけてお届けしている本誌「石川県立美術館だよりの」ですが、昨今の郵便事情により、これまでと同じ日数でお届けすることが難しくなってきました。月刊ということで、短い期間で編集・校正をしており、これ以上作業を短縮することは非常に厳しい状況です。

美術館としましては、企画展や申込締切のある催事情報がある場合、また友の会の会員更新をお知らせする2月号に関しましては、なるべく早くお手元に届くようにスケジュールを調整したいと考えておりますが、コレクション展のみの号などの場合、これまでよりも配達日が少し遅れてしまうことになるかと存じます。事情をお汲みいただき、何卒ご了承くださいますようお願い申し上げます。

今年度の目玉

—令和5年度の石川県立美術館にご注目ください！



国宝《義之損首表乱之世》原跡王羲之
皇居三の丸尚蔵館蔵

今年度開催する当館企画展の概要を紹介いたします。
「陰翳のなかの金彩」(会期：令和五年四月二十三日(日)～五月二十八日(日))
春は「金」にクロースアップした展覧会をお楽しみください。近代以降発展を遂げた金沢の箔製造について紹介するとともに、多様な工芸作品を中心に、日本文化に息づく金彩の技と表現をご覧いただきます。

「皇居三の丸尚蔵館収蔵品展 皇室と石川―麗しき美の煌めき―」(会期：令和五年十月十四日(土)～十一月二十六日(日))

本展は今秋開催する国民文化祭の中心事業として、国立工芸館と初めて共同開催する企画です。当館では絵画や書を中心に、国立工芸館では工芸の作品を特集し、皇室と、石川そして前田家とのゆかりを偲ばせる名品一〇点を紹介します。これまで全国展開されてきた三の丸尚蔵館の展覧会としては、過去最大規模です。三の丸尚蔵館からは、伊藤若冲の《動植綵絵》、王羲之の原跡の《義之損首表乱之世》など新指定を含む国宝四件、その他前田育徳会の刀(無銘正宗(太郎作正宗))をなど国宝四点も展示。また近代絵画も、石川ゆかりの画家から横山大観まで、日本美術の粋を堪能していただきます。

「よみがえった文化財(仮称)」(会期：令和六年一月四日(木)～二月十二日(月・祝))

文化財保護への高い意識を持った加賀前田家の事績や、文化財保存修復工房の実績を紹介。優れた文化財の展示やパネルなどから修復の技を展覧します。今年も様々な美や文化を、多様な切り口で紹介する当館企画展をお楽しみください。

次の展覧会

令和5年6月3日(土)
～25日(日)
会期中無休

前田育徳会 尊経閣文庫分館		第2展示室
武の装い I		仏教美術
第5展示室	第3展示室	第4・6展示室
四季の移ろいⅡ 【工芸】	アンフォルメル時代 【油彩画・版画】	優品選 【近現代絵画・彫刻】

ご利用案内

コレクション展観覧料

一般 370円(290円)
大学生 290円(230円)
高校生以下 無料
※()内は団体料金
5月1日は第1月曜日より
コレクション展示室無料の日

開館時間

午前9:30～午後6:00

カフェ営業時間

午前10:00～午後6:00

5月の休館日は
29日(月)～31日(水)

石川県立美術館だより
第475号(毎月発行)
2023年5月1日発行

〒920-0963
金沢市出羽町2番1号
Tel: 076(231)7580
Fax: 076(224)9550
URL: <https://www.ishibi.pref.shikawa.jp/>

石川県立美術館は電源立地地域対策交付金を活用して運営しています。

「石川県立美術館だより」に広告を掲載してPRしませんか?

広報紙広告ならではの
メリット

- 地域に根ざした情報発信
- 石川県での知名度向上
- 自治体発行の信頼度の高い広報媒体

他エリア自治体広告もお任せください!
お問い合わせ **092-716-1401**

株式会社 **ジチタイアド**

福岡県福岡市中央区薬院1-14-5MG 薬院ビル7F 財源確保

※株式会社ホープの広告事業は、2021/12/1付で「株式会社ジチタイアド」に分社化しております。